
恋姫無双で就職中！

倉屋敷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双で就職中！

【Nコード】

N5248Z

【作者名】

倉屋敷

【あらすじ】

高額なアルバイトありますとの謳い文句にほいほい釣られてしまった主人公、倉屋敷直衛は流されるままに流されて契約書に拇印をしてしまう。悲しいこと(?)にその契約書は新世界への旅立ちへの許諾証であり、直衛は異世界である恋姫無双の世界へと飛ばされてしまう。

第一話 日当3万+出来高払い

「お、その辛気臭そうな顔したお兄さん、いいバイトがあるよ？ちよつと聞いていかないかな。日当3万+出来高払いの優良アルバイトだよ？」

と、大学からの帰宅途中に如何にも怪しげなおじさんに話かけられた。

辛気臭そうで悪かったな！

こちらとら、もう12月だっていうのに就職先も決まってないんだよ！

辛気臭い顔してるに決まってるだろ！

「んー、そんな怪しそうな顔をしないで。バイト代があからさまに高額過ぎるのが気になってるんだろ？それも当然、もうクリスマス間近だからね、人手不足もいいところなんだよ！だからこそ、高額で、且つ暇そうなお兄さんに声かけしているわけなんだけど」

クソ！

気にしていることばかり言いやがって。

確かにクリスマスには予定はない！

今年も今年でクリスマス爆発しろっっていう係りだからな俺は！

だけど、暇なのは事実だし、バイト代が高額なのも事実。

癪に障ることばかり言われていたが、これはこれでいい臨時収入になるか。

「お兄さん乗り気だね？いい顔になってきたよ。作業内容は現場についてからでいいかい？まあ、バイトだから上の指示に従って汗を流してくれればいいだけなんだけどね」

ん？作業内容がいまいち分からないな。

クリスマスに関することだから、たぶんケーキを作ったり、なんなりだとは思っただけ。

もしかしたら、商品の売り子？

いやはや、辛気臭い顔の奴に売り子はさせないから、やっぱり単純作業か力仕事のどちらかかな？

何はともあれ、バイトにさせる内容は単純なものであるうから気にしないでいいか。

「お兄さんがこのバイトをどう捕らえているかはわからないけど、慣れれば大したことはないよ？一日でも過ぎたら嫌でも理解できるはずだからね。はい、やるという方向で問題ないのならこの紙に必要事項を書いてね」

まだ何も答えてないのだが、名前だとか住所だとか雇用契約用の用紙を渡された。

相変わらず雰囲気に流されやすい性格だなあと実感。

とりあえず、記入してみようか。

それはいいんだけど、こんな冬空の下、バンダー片手に何故書かないといけないんだ。

先に現場につれていってくれても良さそうなのに。

「そうそう、氏名、年齢、住所・・・あとは給与の扱いかな？一括払いがいいか即日払いがいいか。他には・・・ああ、裏面にアンケートがあるからそれにも答えてくれると嬉しいかな？なくてもいいんだけどね」

給与かあ・・・一括なら一度に大金を手に入れれるし、即日も即日
で悪くない。

けど、一括払いの方がお年玉つぼくていいかな？

それで、これがおじさんに言われたアンケートか。

なにになに・・・

【貴方を三国志の武將に例えたとき、その能力値はどの程度でしょうか。300ポイントを、武力、統率、知力、政治、魅力に振り分けてください】

んーこれって何もバイトに関係のないことだよな？

だから答えてくれると嬉しいとか、そういうことなのか。

このおじさんの上の人が、三国志好きなのかな？

俺も好きだけども。

それで、能力の振り分けか。

300ポイントってことは平均値にすると60な訳だけど、流石にそれは安直過ぎるかな。

かといって、極端にしようにも・・・悩むなあ。

こういうときは自分の好きな武将を参考にするのがベスト。

俺は、典韋とか張任とかの義理深い武将が好きなんだよね。

忠誠を誓って主君の為に戦うっていう、なんというかカッコいいよね。

というわけで、

【武力：100 統率：1 知力：98 政治：1 魅力：100】
にしました。

だって、こういったオリジナルの新規武将ってのは自分の理想を現実
に投影している訳でしょ？

俺には、兵を統率するなんていうことはたぶん無理だと思う。

政治も無理かな？閃き！っていうのはいいと思うけど、政治って所謂知識でしょ？

勉強はあまりとくいな訳ではないんだよね。

だから、直感で戦う戦闘狂みたいな感じでの能力振りに！

魅力を限界まで振ったのは言わずも・・・クリスマスに独り身は辛いよ？

それで、次の設問は

【仮に、何でも願いが叶うとした場合、貴方が叶えたい願いとは何かお答えください】

ん？なんだこれは？

「お兄さんもその設問で躓きますか。その設問は、単純に一つ願いが叶うならば、と考えれば良いです。前に記入していたただいた方は、金銀財宝が欲しいだとか、新世界の神になりたいだとか、魔法が使えるようになりたいだとか、そういったことを書かれましたね」

つまり、欲望や中二病の類をここに書けというわけか。

いや、自分のそういった部分をこんな場所に書くとかおかしいだろっ？！

まあ、書くけどさあ。

【Dies Irae の スルーズワルキューレ 戦雷の聖剣が欲しい】

書いた！書いてしまった！

これは恥ずかしい！

「失礼ですがお兄さん、このDies Irae の スルーズワルキューレ 戦雷の聖剣とは何かを私に説明していただけますかな？」

げっ？！

なんでそんな恥ずかしいことを・・・ええい、既に書いてしまった後なのだ、今更何を戸惑うことが！

「ええーつと、Dies Iraeっていうゲームに出てくる武器のことだよ。人の魂を使って超常的な力を振るったり、自分の願いの通りの異世界を創りだしたりすることができる・・・んだ」

あああああ、書くんじゃなかった！

これは恥ずかしい！公開処刑っていうんじゃないのかこれは！

「なるほどなるほど、では、お兄さんは人を殺したいのですか？消費するものが人の魂である以上、それは避けられぬことだと思いますが」

「そういうわけではないけど・・・もしも、もしも中世のファンタジー的な要素のある世界なら、戦争もあるだろうし、積極的とまではいなくてもそういう状況になるだろうからさ」

「ふむ、つまりお兄さんは人殺しになりたいのではなく、そう、なんというか英雄のようなものに憧れていると、そういうわけですかな？」

「んー、英雄とはちょっと違うんだけど。なんというか、騎士というか、義理深い存在に憧れてるんだよね。他者の為に身を捧げて行動するような、そんな存在にさ」

「ははあ、なるほど。それはそれは大層立派な夢ではないですか。いいことだと思いますよ、私は」

今日出会ったばかりのおじさんと中二病な会話を繰り広げてしまった。

しかも理解までされている・・・死にたい。

「では、結構な時間が経ちましたので、アンケートはそれくらいにして後は判子だけ押ししてもらえますか？」

判子？判子は流石に持ち歩いていないぞ。

「ああ、無ければ、この朱肉に親指を押し当てて、拇印でも結構です」

拇印でもいいのか。

まあ、おじさんがそれでいいというのであれば拇印で済ませるけど・・・

「これでいいかな？」

「結構でございます。それでは今から現場へご案内しますのであちらの車に……」

おじさんが指し示した方を見ると確かに車がある。

これに乗ればいいってということなのかな？

ただどこれって、工事現場とかで使う車両なんじゃないかな？

ってことは、作業内容は工事現場での力仕事っていうわけ？

「……あちらの車に轢かれてください」

はっ？

と、聞き返そうとしたときには、既に車に轢かれて意識も……

第二話 新世界へ

「・・・あれ？俺はさっき車に轢かれたような」

ようなではなく、確かに轢かれたはずだ。

大学からの帰宅途中に変なおじさんに話しかけられて

アルバイトの勧誘をされて、そして轢かれた。

「いや、確かに轢かれて死んだような気がするんだけど・・・って！
ここはどこだよ！」

車に轢かれて死んでいるなら意識はないはず？

まあ、これは推測だけだし、死んだことがないから。

生きているのなら、治療の為に病院にいるはずだろ？

まあ、もしかしたら数ヶ月意識を失っていたのなら

それはそれで家なり病院なりのベッドで寝ているはず。

だけど

「荒野だな。紛うこと無き荒野だ。はっ?!なんだこれは、どうい
うことだ!」

おいおい、これはどういうことだ。

目覚めたら荒野とか、現実的に有り得ん話だろ。

「って、待てよ。もしこれが死んだ後の天国とかなら・・・」

と、呟いてそれはないかと理解した。

大学帰りの服装に、べつとりと血のあとが付いている。

つまりは、おじさんと出会ったことも、車に轢かれたことも事実。

そして気が付けば荒野にいるという現実だけが残される。

「はあ・・・こんなことになるならおじさんの話を聞かなければ良かった」

まったくもってその通りだが、時既に遅く、後悔先に立たず。

「とりあえず、俺は俺のせいで荒野にいるというわけか。で、どうしようか。ずっとここにいても餓死するだけだろうし・・・とりあえず、今何を持っているかの確認だな」

鞆の中には・・・何も入っていない。

いや、入っていないこともないが、空のクリアファイルが一つあるだけで他には何も無い。

「そついえば、態々休日なのにレポートを出しに着たんだよな。何も入っているわけ無いか」

鞆を逆さにして振っても何も出てくるものは・・・あった。

「ん、なんだこれは。こんなもんを入れた記憶なんてないが・・・説明書？」

何も入っていないはずの鞆の中から、見るからに怪しい説明書と書かれたものが出てきた。

「説明書、説明書ねえ。なんの説明書だ？」

怪しいことは承知の上で、とりあえず開いて見る。

「倉屋敷直衛様専用説明書？えーっと、目次は・・・貴方の置かれた状況、この世界について、チュートリアル・・・おい！10ページしか中身がないぞ！後は全部余白かよ！」

説明書には自分の名前が書かれていた。

目次の内容は、今の境遇を説明してくれるものなのだろうか

少なくとも、必要不可欠な内容が記されているに違いない。

少しでも情報を得る為に読み進める以外に無いか。

「なにになに・・・直衛様へ、本契約書への拇印、誠にありがとうございます。さつそくですが、貴方様の置かれた状況について説明させていただきます」

「貴方様は弊社との契約に基づき今その場にいます。具体的には、

貴方様ご自身が説明してくださったように、ファンタジー溢れる世界にて騎士の如き活躍ができる舞台を用意させていただきました」

「貴方様との間に交わされた契約は、貴方様の願いを叶えるというものであり、弊社はそれを積極的にそして否応なしに叶えています。故に貴方様は現在、荒野にお立ちになられ、途方に暮れているものかと思えます」

「ですが、これも貴方様が真に望んでいることでありまして、弊社への苦情はお断りしています。何卒、ご理解の程、よろしくおねがいします」

いやいやいや・・・そりゃあ確かに、そうだったらいいな。

とか、そんなことはいったけどさ！

実際になるとは思ってたよ！

思ってたらもつと別のことを言ってただろうし・・・

ああ、なるほど。

それも含めて真に望んでいるということか。

なら、これもまた仕方が無いのか？

うーん、とりあえず読み進めるとするか。

「さて、自身の状況についてご理解なされたと思いますので、この世界についての説明をさせていただきます。この世界は、恋姫無双

という世界を元に構成されています。ご存知でしょうか？」

「知らなかった場合の簡易的なご説明として、歴史的に有名である三国志の武将のほとんどが女性に置き換わった世界であります。これもまた、貴方様のご希望通り、クリスマスに独り身は寂しいという願いを考慮して創らさせていただきました」

「当然のことですが、この世界では以前の世界のように平和などという言葉はありません。群雄割拠、戦乱の時代であるといっても過言ではなく、これもまた、貴方様の望んだ通りの世界であると思われます」

「従いまして、貴方様の願いである、騎士になりたいという願いを叶えるに相応しい世界となっていますので、御存分に夢を叶えていただきたく思います」

御丁寧にどうもありがとうございます……って言うんでも思っただか！

三国志ってあの三国志だろ？

・ ゲームの三国無双にもあるように、武将が雑兵を蹴散らしていく…

うわぁ、これは死んだだろ。

俺が好きなのはアクション系の三国志じゃなくてシミュレーション系の三国志なんだよね。

まあ、歴史を知っているとと言うことはかなりのアドバンテージにな

るな。

だけど、なんだっけ？恋姫無双？

それについてはちょっとわからんな。

武将が女性化なんだろう？

毛むくじゃらでガチムチな女とか勘弁願いたいのだが・・・

「注意事項と致しましては、貴方様の实力は前の世界の实力ではなく、貴方様がアンケートに書き込んだ実力となります。くれぐれも注意してください。統率が1なので兵を率いたとしても烏合の衆がよいところ、また政治が1なので恐らく人の名前を覚えるのにも苦労するでしょう」

「しかし、武力が1000である為に向かうところ敵なし、知力が98という値であり、そうそう罠に掛かることはないでしょう。それに加え、魅力が1000となっていますのでフラグの建築には暇が無いでしょう。刺されないように注意してください」

「他の注意事項としては、この世界は三国志がベースとなっている為に名前の表記が以前の世界と違います。姓、名、字、真名といった項目があり、特に真名というものは、本人が心を許した証として呼ぶことを許した名前であり、本人の許可無く真名で呼びかけることは、問答無用で斬られても文句は言えないほどの失礼に値します。くれぐれも気をつけてください」

今更だけど、武力を1000にしておいてよかった。

これを何の気まぐれか武力を1にでもしておいたら賊に殺されて一貫の終わりだったはず。

ほいほいと契約書に拇印を押した俺だけど、これだけはグツジョブだったなあ。

んー、それと名前か。

流石に倉屋敷を姓名字に当てはめるのは難しいだろうし、惜しいけど名は変えようかな？

三国志で何か適当な武将を・・・胡車児でいいか。

本当は典章とかのがいいんだけど、何故か典章を選んではいけなような気がする。

だから、ここは典章の宿敵となる胡車児でいこうかなあ・・・と。

姓は胡、名は車児、字は・・・無い。

真名はそのまま直衛でいいか。

「最後に、貴方が望んだ Dies Irae の スルーズワルキューレ 戦雷の聖剣についてです。こちらの方に関しては、形成位階までの開放を行っています。創造位階以降はご自身の渴望を良くご理解された上での自己解放となっています。故に、貴方さまが御成長しなければ発動できません」

ん？となると形成は可能というわけか。

後で試して見よう。

にしても、聖遺物が使えるってことは

俺は不老不死なのか？

他に聖遺物を有している者はいないだろうし、事実上の無敵モード
というやつか。

「しかし、スルース・ワルキューレ戦雷の聖剣は宝剣の類であり、王族でもない者が所持を
していると不信がられます。くれぐれも、使用に注意してください」

ですよな。

まあ、短剣でも構えて攻撃範囲を誤魔化して使うとしよう。

活動段階の聖遺物は、不可視の斬撃を放つことができるわけだし、

そういった小細工にはうってつけかな？

「それでは、準備がよろしければチュートリアルに移らせていた
できます。説明書を地面に叩きつけると音声ガイドンスがスタート
します。ただし、一度叩きつけると二度と説明書が開けなくなる為、
十分に理解した上で行ってください」

チュートリアルしたら説明書読めなくなるとか、なんだこの不親切
な設計は。

まあいいや、現状は理解したわけだし、とっととチュートリアルを・
・

「クソツタレ！よくも願いを叶えてくれやがったな！」

と、叫んで説明書を叩き付けた。

第三話 主人公紹介と用語説明

説明書

本編より説明書の記事の方が容量が大きい。なんということでしょう。

【人物紹介】

(1) 元いた世界の名前

姓：倉屋敷くらやしき

名：直衛なおえ

(2) 恋姫無双の世界の名前

姓：胡こ

名：車児しゃじ

字：-

真名：直衛なおえ

年齢は22歳

(3) 風貌

元の世界では冴えない人物であった。
が、恋姫無双の世界では魅力100ということもあり、一級のフラグ建築士ができる存在である。

(4) 能力

武力：100

武将としての最高峰。後に説明する聖遺物も考慮すれば武神というに相応しい。

彼が戦場で死ぬようなことはなく、死ぬとするのなら主を失ったときだけだろう。

統率：1

誰も彼の言葉に耳を傾けてくれない。

兵は指示を聞かず自ずから動き回り、見事なまでの烏合の衆と化す。

知力：98

極めて智謀に長けている。

が、政治（知識）に乏しく、現実的には確実に当たる勘といったところ。

語彙が少なく説明力に乏しいことから、理解は出来ても説明は出来ず、それを他者に伝えられない為、彼が智謀の士となることは不可能だろう。

政治：1

無知蒙昧

ただし、以前の世界での言葉は知っている。

新たに覚えると言うことが非常に難しいだけである。

魅力：100

誰もが彼に目を惹かれる。

どこにいても彼は目を惹かれ、注目の的となる。

故に、隠密行動には適しておらず、囷として用いるのが適当。

何も考えずにフラグを積み立てれば刺されるのみ。

ただし、能力値は年齢によって増減がおきる。

歳をとれば衰え、また若い内は能力値を上げることが容易であるが、

彼は不老不死である為、衰えることはなく成長するのみである。

委細は後述に示す。

(5)所持品
スルース
フルキユーレ
戦雷の聖剣

形態は武装具現型。位階は創造。発現は求道型。伝説通りの神話の武器ではないが、フリードリヒ3世の宝として保管されていた高い霊格の聖遺物であり、電撃を使った攻撃が可能である。

だが、主人公である直衛は一時的に制限がかけられており、位階は形成段階に留まる。
また、聖遺物である戦雷スルースフルキユーレの聖剣を有している為、直衛は不老不死である。

【聖遺物】

人の思念を吸収することにより、絶大な力を持つ様になったアイテムのこと

聖遺物を扱うためには永劫破壊と呼ばれる理論が必要である。

作中で主人公である直衛が扱う戦雷スルースフルキユーレの聖剣もその一つ。

【永劫破壊】

(1)永劫破壊エイヴィヒカイトとは

聖遺物を扱うためには、永劫破壊エイヴィヒカイトと呼ばれる理論が必要。これは発動に人間の魂を必要とし、使うには常に人間を殺し続けねばならない。殺せば殺すほど強くなっていき、殺した数に相当する霊的装甲を常に纏うようになる。

しかし魂にも質が存在し、単純な量だけではなく、戦士や殺すことを躊躇する相手の魂ほど質が高く、質と量の両面を兼ね備えるほど効率的に強化される。永劫破壊エイヴィヒカイトを操る者は聖遺物によってしか倒す

ことが出来ず、それ以外の手段での攻撃は一切通じない。聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ防ぐことは出来ない。

また喰らった魂に相当する生命力を得ているため、仮に肉体的損傷を受けてもすぐさま再生される。聖遺物を破壊されない限り、エイヴィヒカイトの使い手は不老不死であるが、逆に聖遺物が破壊された使い手は死亡する。

作中では、直衛以外にエイヴィヒカイト永劫破壊を扱える者は居らず、故に彼が死ぬ方法は自殺以外にない。

(2) エイヴィヒカイト永劫破壊の位階

エイヴィヒカイト永劫破壊には4つの段階がある

【活動】

初期段階 限定的に聖遺物の特性を使用できる
刀剣あるいはそれに順ずるもの場合、不可視の攻撃をすることができる

身体能力はこの段階で既に遙か人外の領域

例：時速数百キロの速度で行動が可能であったり、その拳は容易に鉄柱を損壊させる。

【形成】

聖遺物を具現化できる

例：刀剣の類であれば、刀剣自体が不可視の状態から具現化される。五感や霊感が超人化し、破壊と戦闘を高次元することが可能

【創造】

切り札であり必殺技

使い手の渴望に従った都合のいい世界を創造する
大きく分けて二種類ある

【霸道型】

創造の一種 術者の周囲の空間を異界に変える、他者を食い潰して進む道

異界に取り込む人が増えることで効果が薄まるが、聖遺物使いでなければどれだけ飲み込んでも影響は無いに等しい

【求道型】

創造の一種 術者自身を異界として肉体変化や特殊能力を付与する
自分一人で突き詰めていく道であるため、他者の影響を受けない

【流出】

エンヴィヒカイト
永劫破壊の最上位階。

霸道型である場合創造の異界を永続的に全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。

求道型の流出は、術者自身が世界の理から外れた完全永遠の存在となる。

つまりぼっち。

(3) エンヴィヒカイト 永劫破壊の武装形態

人器融合型

肉体を聖遺物と融合させる。攻撃力に特化し、全タイプ中最高の身体能力を発揮する。しかし聖遺物との同調率が高くなるほど極度の興奮状態となつていき、理性的に判断することが困難になる。そのため、爆発力は高い反面、格下から足をすくわれ易いタイプでもある。性格としては好戦的で破壊的な者、刹那主義者や享楽主義者などがなりやすい。聖遺物は、拷問や処刑に使用され、怨念を餌にした物が大半。

武装具現型

聖遺物を刀剣などの武器として扱う。基本形でありバランス面で優れ、特筆すべきメリットもデメリットもない。突出した点も穴もない特性上、実力以上の力は発揮できないため、未熟な者は決定力のない器用貧乏だが、強い者は万能となり隙がなくなる。主従関係がはつきりしているため暴走・自滅の危険性が低い。性格としては職業的な戦闘訓練を受けた者、現実主義者などがなりやすい。聖遺物は、武器・兵器などの戦闘における道具として使用され、血を吸った物が大半。

主人公である直衛はこのタイプ。

事象展開型

魔術や呪術のような働きをする。物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中には攻撃力が皆無の者もいるが、反面防御や補助に優れており、殺すことが困難。融合型と組んだ場合は非常に危険。性格としては理的で聡明な者、探究心と神経質な拘りを持つ者など、学者・芸術家タイプの者がなりやすい。聖遺物は、書物や芸術品など、作者の狂的な情熱を餌にした物が大半。

特殊発現型

上記のいずれにも属さないか、または複数の性質を持つ。他を上回る強大な力を発揮することもあれば、状況次第では全く役に立たないこともあるなど、非常に不安定なタイプ。性格としては特定の物事や人物に囚われて盲目的になっている者、純度の高い宗教家や復讐者がなりやすい。聖遺物は、質の浄不浄に関係なく、信仰を餌にした物が大半。

第四話 チュートリアル

「それではチュートリアルをスタートします。ここより北西に5里向かったところに山賊になるうかならないか迷っている方々が3名いらっしやいます。その方々を殺戮ないしは恫喝して、衣類と金品を奪ってください」

「おおおお！」

さっそく凄い音声が流れ出した。

こんにちわ、死ね！も、いいところ過ぎるだろう。

「現在の胡車児様の服装はこの世界では極めて異例であり、不審がられること間違いなしです。従って、至急この世界での服装を整える必要があります」

「また、聖遺物のお陰で不老不死であることは間違いないのですが、金品が無ければ食事を取ることも、宿に泊まることも出来ません。この世界で信用を勝ち取るには金品は必須です。見ず知らずの者が無銭で現れようものなら、そのものは賊と判断されても文句は言えません」

こうやって聞くと、かなり厳しい世界だと言える。

出会った人をまず疑ってかからなければならぬというのは、以前の世界でも他称なりともあったはずだけど、即座に賊と判断されることはなかった。

だからこそ、疑われない為に金品を所持すると言つのは理解できるのだが……

「胡車児様の目標は主に仕える忠実な騎士であり、清廉潔白な英雄ではありません。躊躇することなく実施してください。略奪後、更に北西に7里向かったところに陳留と呼ばれる都市があります。そこを拠点に暫く大陸を回ると良いでしょう」

確かに、確かに俺自身が潔白である必要はない。

むしろ泥を被り、後ろめたいことを主にやるべきではないだろうか？

自身を省みずに行動するということが、騎士の在り方……というわけでもないだろうが、俺自身が望んでいるのは結局そうだったものだろうか？

ならば、悩む必要はなく、即座に決めるべきなのだが。

殺戮か恫喝

気に掛かっていることは殺すと言つこと。

平和な世界で過ごしてきた俺にとって、人を殺すということは極めて重い。

が、これも運命か。

どの道避けられぬ結果であるのなら、避けては通らず突き進むのが吉。

慣れたいとも思わないけど、慣れる必要もあるだろうから。

「こう、冷酷に考えることができるのも知力を無理に上げたせいなのかな」

「いいえ、胡車児様は優柔不断な方ではございませんでしたから・
・ですが、知力に極振りを行ったことにより、多少の影響があったことは否定できません」

「うお！会話が成立している！ただの音声ガイダンスかと思ったら以外に出来るな」

「チュートリアル終了まではある程度の会話は出来ます。他に何かお聞きになられることはありますか？」

「なら、この世界には俺のように契約によってきたものはいるのか？またそれに準じるもの」

「この世界は胡車児様の為の世界であるため、他の契約者は存在していません。ただし、この世界の構成上、外部から来たという設定である男性がそれに該当する可能性はあります」

「つまり、ゲームとかでいうところの主人公ってやつになるのか？」

「はい、北郷一刀という名の高校生がその主人公に値します。ですが、胡車児様の世界でいう一般的な高校生の性能しか持ちませんので、驚異的ではないと思われませう」

なるほどねー

まあ、そういう存在もいるにはいるということか。

「北郷一刀君は悲惨だね。ただの高校生でありながら、何の力も持たずに三国志の世界に来るなんて・・・直ぐに死んでしまうのではないのか？」

「北郷一刀にも若干のハンデがあり、開始早々に死ぬことはありません。必ずどこかの勢力に拾われて生きると言う運命になっています。しかしながら、その後のことは北郷一刀次第ではありませんが」

「生身で生きていられるだけ十分だと、そう思うんだけどね。んー、とりあえず聞くことはこれ以上ないから山賊になりそうな方々の場所にいこうとしようか。で、どれくらいで着くのかな？」

「恐らく、全力で向かえば1分以内かと。胡車兎様は聖遺物をお持ちですから、容易に時速数百キロで走れます上に、雷の適正をお持ちです。したがって、最終的には秒速200キロを優に超えることになります。ですからくれぐれも・・・」

「はいはい、誰かが見ている前ではそんなことはしません。というか、秒速200キロとか見えるのか？とは思っけど」

「ちなみに、チュートリアル中の行動は誰にも見られませんから御安心を。これはあくまでチュートリアルですからね」

「それはいいことを聞いた。なら、全力で向かうとするか」

「そういえば一里ってどれくらいの距離だったっけか。」

確か日本での一里が4キロくらいで・・・中国の単位はそのは8分の一くらい？

それであってるなら400メートルくらいのはず・・・

山賊がいるのは5里先だから、2キロ先になるというわけか。

分速2キロだとしたら、時速120キロの速度で走れるというわけだが。

んー、いまいち実感がわかないな。

「悪いけど、5里をどれだけで走れるか計ってみたいんだ。時間の計測を頼めるか？」

「お任せください。それもチュートリアルの内です。全力で駆け抜けて実力をお測りになるのがよろしいかと」

「よし、なら駆け抜けてみるか」

投げ捨てた説明書を拾い上げ、北西へ駆け出す。

「うおおおお！なんて速さだ！自動車よりも早いんじゃないか!？」

俺は別に陸上選手だったわけでもない、ただの帰宅部員だったのだが・・・

この適当な走りですらこの速度、確かに一分以内に着けそうだ。

感動しているのも束の間、目の前に山賊らしき三人組みを見かけて

足を止める。

「へえ、車は急に止まれないとかいうけど、俺は急に止まれるんだな」

「むしろ止まれなかったら欠陥品だと思いますけど・・・ちなみに、5里を駆けるのに掛かった時間は30秒ですね」

となると、5里＝2キロだから、分速4キロの時速240キロか。

人間じゃないな。やっぱり聖遺物使いつて人間じゃないなあ。

「アニキ！人が！突然人が現れました！」

「てめえ、そんな訳ねえだろ。人が突然現れるなんて・・・うおあ？！」

黄色い布を被った三人組みと遭遇・・・三人組みでいいんだよな？

なんかやけに小さい奴と、アニキと呼ばれている奴、後はデブ。

さてよ？黄色い布ってことは丁度黄巾党が活躍する時期か？

それは好都合、立身出世する為のいい機会だ。

俺には武力でしか評価されないだろうし抜群の時期だ。

「おい、デブ。お前はこいつがいつ来たか知ってるか？」

「・・・わがんね」

「だめだ、デブに聞いたのが間違いだったな。そこでその兄ちゃん、一体どこから現れやがった？」

「ん？ここから南東5里のところから来たただけだぞ。全力疾走で30秒ジャストってところだな」

「アニキ、こいつ頭おかしいんじゃないですか？」

「そりゃそうだろう。が、言葉は通じてんだよな？なら、イカレちまった野郎なんだろう」

酷い言われようだ。

俺は事実を述べたまでであって、決してイカレちまった野郎ではないんだが。

さて、説明書はああ言ったが、こいつらは根っからの山賊に見える。

「なあ、ちよつと聞きたいんだけど・・・お前らは山賊、いや賊であつてるのか？」

「っ！馬鹿が、てめえらが周りを警戒していねえから！このトチ狂った奴に計画聞かれてんだろうが！」

「すみませんアニキ！今までと違って大きな仕事ですから、つい浮かれて」

「なるほどなるほど、普段も小事の罪を犯してはいるが、これから根っからの賊になろうって訳か」

「なんだ、てめえそれが悪いかよ！賊にならなきゃ生きていけねー
ならなるしかねえだろうが！」

「そつだそつだ！ぽつとでのイカレ野郎が生意気いつてんじゃねえ
！」

「ああ、抗弁ありがとう。確かにその通りだろうが、それはお前ら
の視点であつて奪われる側の視点ではないな。とはいつても、俺も
大して変わらないことを今からするわけだが・・・な！」

エイヴィヒカイト
永劫破壊の活動位階を利用してデブに切りつける。

俺からしたら右手を振つただけなのだが、不可視の斬撃はデブを容
易く切り裂き、腹を一刀の内に輪切りに変える。

瑣末な鎧を着てはいたようだが、聖遺物の、スルーズフルキューレ戦雷の聖剣を前に物質
の堅さなど意味はない。

いや、意味はあるが、物理的な面以外にも霊的な面で防がねば防げ
ぬ行為。

この世界では誰も抗うことはできない。

のはいいのだが、些か本気でやりすぎたかな？

腕を振るっただけで、不可視の斬撃が当たっていない地面までもが
抉れ粉碎している。

んー、衝撃波つてやつか。

本来であれば生き残っているはずのチビとアニキと呼ばれる奴も木っ端微塵になっっているわけだし・・・

これは大幅な手加減が必要だな。

「お見事です胡車児様！これでご自身の実力を把握できましたね？」

「ああ、嫌と言うほどに把握できたよ。走れば時速240キロで走れるし、腕を振るえば衝撃波がでる。いやはや、やり過ぎもいいところだな」

「えーっと、衝撃波については、恐らく胡車児様が聖遺物を巧く扱えていないからで・・・力に振り回されているせいだと思います。つまり、要練習というわけですね」

「やらないといけないことばかりだな。まったく面倒極まりりといったところだ。で、この後は何をするんだ？」

「チュートリアルは山賊の討伐、つまりは以上で終了です。お疲れ様でした。後は自由に行動してくださいさって結構ですよ？」

「こっからが本編ってわけか。んーどうしようかねえ、確か北西に7里言ったところに陳留があるんだっけ？だけど、衣服とか剥げなかったんだよね・・・木っ端微塵になっちまったからなあ」

殺してから気が付いたのだが、そういえば金品を奪ったり、衣服を剥ぎ取ったりするんだった。

デブはまだ辛うじて形が残っている者の、後の二人は血溜りでしか

ない。

やれやれ、どうするべきか。

「でしたら、陳留にして仕官するのがよろしいでしょう。胡車児様の武力を持つてすれば容易に武官になられることでしょう」

「まあ、そんなところか。金が無くて信用を勝ち取れないなら、実力を見せて実用性で判断してもらうしかない。幸い、陳留には彼の人材マニアである曹操がいるだろうからな。飯にはありつけるか」

「ですが、曹操の性格からして胡車児様が一度部下になった場合、手放すとは考えられません。胡車児様は既に曹操の騎士になることを考えていらつしやるのですか？」

「ああ、それはたぶん問題ないかな。というのも、俺は武官ではなく一兵卒として曹操の下へ行こうとしているから。最初から武官として活躍するのも、そりゃあ英雄譚としてはいいだろうけど、やっぱり兵卒から成り上がったの立身出世だろう？」

「一兵卒ですか・・・それはそれは大層な物語になりますね。どうやって推挙されたり、見出されたりされるかは兎も角、夢のある話でいいと思います」

まあ、それもあるんだが、実際にはもつと微妙な問題もある。

俺のように三国志とかのシミュレーションゲームをやったことある奴はわかるのだが、優れた能力値を持つ奴は賃金が高くなる。

だが、現状の曹操は恐らく刺史程度・・・って、あれ？この時期っ

て陳留に曹操がいたっけか？

まあ、説明書も陳留に曹操がいることに疑問を抱いてないわけだし、これは正しいんだろう。

つと、それは兎も角、現状で刺史ということは扱える資金も乏しく、これから飛躍していく時期に高い人件費が掛かるのは大きなロスとなる。

それで優れた武将を抱えることができるのであれば良いのだろうが、俺が曹操陣営に留まるかどうかはまだ分からぬ話である。

つまり、兵卒の身で曹操が如何なる人物かを見極めた方が都合がよいというわけだ。

後は、兵卒であった方が自由の身に近いといった点。

人を殺して魂を積極的に集めたいと言つのもある。

武官のある一定の立場になってしまえば、前線に出て戦うことなど皆無だろうからね。

「胡車児様、お考え中のところ申し訳ありませんが、チュートリアルが終了した為に私にもお別れの時間がきました。きたのですが、一つお聞きしたいことがあります。・・・よろしいですか？」

「ん、もうそんな時間なのか。チュートリアルまでの音声ガイドなどスなんて実に律儀だな」

「定時に消えるのも私の役目ですから。えーっと、それで質問なん

ですが、胡車児様はこの世界に来たことを恨んではないのですか？やけに順応しているようで、その、不思議なんですが」

「理不尽だと、そう思ったけどさ。結局のところ、これは俺自身の願いであったことは確かな事実だし、俺ってリアリストなんだよね。実際に別世界に着ているわけだから、前の世界の都合では動けないわけだし、ならこの世界の都合で動いていくしかないよね」

殺さなければ死ぬと言うのであれば、殺す。

奪わなければ死ぬと言うのであれば、奪う。

普通はそういった問題に対して何か葛藤があるはずなんだけど、俺の場合は極めて薄い。

先の山賊に対してはある程度は悩んだが、結局は殺すことにした。

いざ実戦で躊躇しても困るわけだし、後のことを考えれば有効な判断だよな。

つと、合理的な思考をしているつもりなんだけど・・・周りの状況に流されているとも言えなくもないか。

ただ、それを理解して行っているかそうでないかは大きな違いだと俺は思うけどさ。

「割り切って行動しているということですか。感情は二次、全てを合理的に進めていく・・・実に効果的だとは思いますが、それでは・・・」

「人らしくない、つて？ま、余裕が出来たら人の真似事だつてするさ。でもさ、今の俺はこの世界に着たばかりだし、やれることはやらないといけない。運よく聖遺物使いになれて不老不死となったわけだけど、そうでなければ人なんて簡単に死ぬんだから。嫌もなにもない」

「なら、早く戦乱が終わり、胡車児様が人として振舞える世界になるといいですね」

「その通りだが、別に戦乱が終わらずとも人の真似事はするぞ？そうだな、人並みの暮らしを送れる様になってからだな。今はまだ、生きるのに精一杯だ」

「ふふふ、そうなるといいですね。それでは、もうお別れの時間になりましたので、これでお別れです。胡車児様の願いが叶いますこと、お祈り申し上げてこの場を去ります」

なんだか菌痒い事を言われたまま、説明書は塵となって消えた。

役目を終えたということだろうか。

「さて、これからは独り身、一人旅つてやつか。願いが叶うかどうかはわからないが、一先ずは今日の飯を求めて陳留へ向かうとするか」
時刻としてはまだ、昼くらいか？

夕暮れには城門は閉まってしまっただろうから、早めに辿り着いておきたい。

それに、兵卒として仕官しようにも、夕暮れに向かう奴はいないだ

ろっつからな。

「ちゅーて、いっしょちゅーてみますか」

第五話 異世界での錬金術

「ここが曹操の治めている陳留か」

・ チュートリアルその後再び全力疾走をして陳留まで来たわけだが・

存外人が少ないな。

「ま、東京や大阪、近代の日本と比べるのは間違ってる話なんだろうけどね」

大門から入って直ぐの大通りは活気があるといえるが、一本裏道に入ってしまうえば人は疎ら。

更にもう一本進もうものなら、そこにはほとんど人はいない。

大通りが商業地区で裏道が住宅地区であれば確かにその程度かもしれないが、些か閑静過ぎる気がしないでもない。

「そういえば、この時代の徴兵方法は職業軍人ではなかったか。季節がいまいち分からんが、暑くも寒くもないということは精々秋とかその辺か？閑農期で民を兵役に課しているとか、そういった理由で閑散としているのか？」

もしそうだとすれば、一つの機会に出遅れたことになる。

黄巾の乱は相手が弱いが多いと、経験稼ぎには持って来いなん

だがなあ。

「一先ず、裏道から表通りに戻って・・・詰め所みたいな場所を探せばいいのか？閑農期なら兵卒の募集をやってもおかしくないはずだが」

と、表通りである大通りに戻ってから気が付いた。

チュートリアルで山賊から衣服を剥ぎ取るのを仕損じた為、服装が極めて浮いていること。

金品がなく衣服の購入ができないこと。

「困った困った。こういうときの対処方法ってなんだったか・・・ああ、未来から来ているんだから未来のものを売り払えばいいか。恐らく貴重品の類になるはずだ」

とはいっても、今所持しているのは鞆くらいのもの。

後は今来ている冬用のコートだが・・・これ売るしかないか。

安物のコートだが、ポリエステルと綿によって作られているコートなどこの世界には存在しないはず。

一先ずはこれ売り払って衣服を整え、更には武具も揃えるなら揃えたいところだ。

ま、精々粗悪品で身を固めるのが精一杯なのだがね。

「そうと決まれば大通りで、衣服を売っている店でも探すか。んー、

そうだな、あの店が良さそうだ」

大通りの中で一際目立つ店に狙いを定め、そこにコート売りに行くことにした。

理由は簡単、都市内で最も大きい店と言う場所は大抵が偉い人々、貴族など富裕層が利用しているはずだ。

そうであれば、この日本から持ってきたコートが極めて貴重な品となり、高価に買い取ってもらえるに違いない。

富裕層の方々に毎度毎度飽きない品を提供するということは非常に労力がかかることだろう。

そこに、明らかに異質とも言える物品が売りに出されるのだ、渡りに船とはこのことで、ましてそれが非常に珍しいものであるのなら如何様にも値段は吊り上げられるはず。

「主人はいるかな？買い取ってもらいたいものがあるのだが」

店内に入り内部を見渡す。

・・・げっ、なんだあれは。

いや、まてよ？なんでこの時代にブラジャーなんてものがあるんだ。

んー？んー、でも、原始的なものは古くからあつたらしいからいいのか？

ただ歴史書に残っていないだけかもしれないからなあ・・・都合が

悪くて消されただけかもしれない。

細かいことはいいか、現にここにブラジャーが売っている、それだけの事実で十分。

「ようこそいらっしゃいました。私がこの店の主であります。買取をご希望のことので、お品の方はそちらの手持ちの品でよろしいですか？」

「このコートを頼む。ああ、一部の支払いを現物払いにして欲しい。そうだな・・・身動きのとりやすい軽装であるという条件を満たしていれば他は特に問わない。3着ほど用意してもらいたいな」

「それは構いませんが・・・この衣服は実に肌触りが良いですな。どうにも見たことの無い素材で出来ているようですね」

「珍しいだろう？この大陸を越え、遙か羅馬からの伝来品だ。二度と手に入らぬ一品といっても過言ではないと私は思うが・・・ま、私は買い取り価格に口を挟むつもりはない、好きにしてくれ」

「なんと！それはそれは大層貴重なものを・・・大いに勉強させていただきます」

主人はそういうが、実に打算的に目を光らせてコートを検分している。

客の言うことを容易に信じるわけでもなく、あくまで参考程度にそれが信用できるか値踏みしているところか？

当然といえば当然だが、声高々に珍品であると言い、また価格につ

いても主人に任せるといったのだ、安値にはできんだろう。

現に衣服としては最高峰の素材であることもさながら、買取価格も主人に任せるといったのだ、ましてやここは富裕層との取引を主にするだろう商店であることから、下手な値段をつけてしまえば評判に関わる。

精々足元をみるとしても、一部が物品交換であるからそこを突くしかあるまい。

「お待たせいたしました。この衣服の価格ですが・・・この価格にて買い取らせていただきたく思いますが、どうでしょうか？」

多いのか少ないのかよくわからん。

が、先に表通りを歩いていたとき、ある程度の物品の価格は見ていた。

察するに、半月ほどは宿を借りたとしても優に暮らせるか。

元々富裕層向けの場所で、物品交換を希望したのだから多少は金が掛かるとはいえ、些か少ない気もするが・・・

「構わんよ。いい値で構わん。私は主人に任せるといったのだ、私よりも詳しい主人が決めた値段なら間違いなどあるはずもない」

一度口にした言葉を撤回することはできん。

ま、半月の間に兵卒になれば良いだろう。

「ありがたいお言葉で・・・失礼を承知でお聞きしますが、旦那様は旅のお方ではないですか？」

「まさにその通りだが、それがどうかしたかね？」

「いえいえ、滅相もございません。ただ、私どもはある程度この街で顔が利きますゆえに、よろしければ今晚の宿をご紹介させていただきます。だこうと思つた限りでございます」

「ふむ、それはありがたい話だ。何分、ここに来て間もなくでな、それほど詳しいわけではないのだ。それに主人が進める場所であれば外れを引くようなこともないだろう」

「それでは手配させていただきます。ああ、もちろん宿の代金は私にお任せください。此度の商品を譲っていただいたせめてものお礼でございます」

「感謝する。ということ、私が希望した衣類についてもそこに届けられると判断して構わんかな？」

「はい、ここで採寸を終えた後、宿の方へお届けさせていただきます」

「わかった。では主人に任せる」

俺が快諾すると主人は即座に人を呼び寄せた。

大方宿への案内人なのだろうが、実に無愛想である。

「お前は採寸が終わり次第、旦那様をいつもの宿にお連れしろ。く

れぐれも粗相のないようにな」

「お待たせしました旦那様、宿へはこの者がお連れしますゆえ、――
先ずは採寸の方をよろしいですか？」

「ああ、構わんよ。主人も暇ではないだろう、やることはさっさと
やってしまったほうがいい」

奥へと通されて、速やかに採寸を行う。

手際のいいことだ、こう、手間取らないのをみていると気分がいい。
採寸の最中、主人が俺の衣服に興味を示していたのが若干疎ましく
はあったが……

どうやら、俺の着ている服は下着ですら主人の気を惹くものらしい。
やれやれ、商人というものはこれだから……いや、注意深く見て
いられるからこと商人として成り立つのか。

「旦那様、採寸は終了いたしました。後は宿にてお待ちいただけ
ばお届けに参りますゆえに……」

「ああ、わかった。彼に案内してもらえばよいのだろうか？主人の邪
魔をしても悪いだろう、私は先に失礼させてもらうよ」

用を済ませたらさっさとその場を去る。

俺には武具の購入や書籍の購入など、まだまだやらなければならな
いことがあるからな。

それに、こつ堅苦しい言葉使いも面倒ではあることだ、早くここを去りたい。

主人は俺が見えなくなるまで門前で見送ってくれたが、俺としてはそれよりも早く衣服を仕上げてもらいたい。

そう思うのは俺がせっかち過ぎるといふことだろうか。

と、またしても考え込みながら歩いていたら目的地に到着したらしい。

気が付けば俺は部屋に通されていて、案内役の男も既に姿を消していた。

「嫌な予感がするけど、もしかして話半分に適当に返事とかしてたんじゃないだろうか」

俺の悪い癖なのだが、何かに熱中すると他のことが目に入らなくなる。

それに加え、考えながら別の作業をするということも苦手なんだよね。

今回はそれが両方とも発動して、気が付けば宿屋つてことに。

「そんな俺が兵の統率を行えるわけがな・・・って、もしかして統率を1に設定したからさらに悪化してるんじゃないか？」

「胡車兎様、どうか致しましたか？」

「っ！いや、なんでもない。気にしないでくれ。・・・ところで、この付近で短剣の類の武器売っている店を知らないかな？旅の途中で喪失してしまっただけ、代わりを探しているんだ」

「短剣ですか。それでしたら、胡車児様が買いに向かうよりも私が買いに向かった方が良品が手に入りますね。市販で売られている短剣は粗悪品が多く、信頼性のある品をお探しならある程度の伝手をお持ちでない方は・・・」

「なら、手間かもしれないが頼んでもいいかな？護身用にも使える短剣、短刀の類を2本、可能なら箆手や鎖帷子の類も欲しいのだが・・・予算はこれくらいで足りるかな？」

コート売った代金のうち、その半分を差し出す。

「そうですね・・・箆手や鎖帷子の類は入手可能でしょう。ですが、短剣の類に関しては並程度の品質になってしまいかもしれませんね」

「では、もう半分出せば十分か？要求されるのは第一に強度、第二に切れ味で頼む」

「これだけあれば購入できるでしょう。では、使いの者を出しておきます」

ふう、これで大抵の品が揃ったかな？

この世界での衣服も後に宿に届き、鎖帷子や箆手、武器となる短剣も手配できた。

本来であれば、旅をするのに背囊などは必要不可欠なんだろうけど、時速240キロで走れる以上は必要あるまい。

明日にでも詰め所にもいけばいいのかな？

それで無事に兵卒になれば、いいのだが。

「すまないが、暫く休ませてもらう。食事のときまでは起こさないでおいてくれ。衣服やその類が届いたときは後で渡してもらえれば構わないから」

「承知しました。では、ごゆっくりお休みください」

ま、聖遺物使いが疲れたりとか、そういったことはないのだが

肉体的には疲れていなくても、精神的には大いに疲れる。

なんといってもまだこの世界に来て1日目なのだ。

流れるようにここまで来たが、実は心臓はバクバクであり余裕は無い。

ここはさっさと寝て、落ち着くに限る。

明日は待ちに待った、騎士への第一歩を踏み出す日なのだ

体調は万全で望みたいだろう？

第六話 採用試験

「寝すぎたなあ、体がダルイ。んー料理も口に合わなかったせいもあるだろうけど、これはあまりよろしくないな」

昨日は結局、食事の時間までずっと眠ったまま、勿論食事を取って直ぐにまた眠った。

夕食は、恐らく豪華であるものだろうが、如何せん味が薄かった。

日本という国で多種多様な味に慣れていた俺にとってあの薄味は厳しい。

まあ、海が近くにあるわけではないから塩がふんだんに使えないのだろう、こればかりは仕方ないといえばその通りなのだが。

「不満と文句は尽きることがないってのが、いつの世にも言えることなんだよね。満ち足を知らず、って非常に贅沢なことだとはわかっていただけだ」

今は、陳留にある詰め所に向かっている。

根拠は特に無いが、恐らくここに向かえば兵卒になれるだろうと俺の感が告げているからな。

外装に、見繕ってもらった軽装の衣服を羽織り、中には鎖帷子を身に付ける。

街中で実に過剰防衛ともいえる装備なんだろうが、つけておくに越したことは無いだろう。

実際には鎖帷子などなくとも、傷一つ付けられることもないのだが、何も装備せずに傷を受けぬなどと、怪しいことこの上ない。

ま、そういったわけでとりあえず装備している。

今着ているのも、慣れるためだな。

いざというときに違和感を感じていては戦闘に集中できない、つくづく自身の欠点だと俺は思うよ。

短剣は腰につけている。

これもまた実際には聖遺物があるのだから必要はないのだが、不可視の斬撃というものは現実的に考えて有り得ない。

つまりはカモフラージュというわけで短剣を持っている。

2つ持っているのは二刀流に憧れていたから。

騎士といえば大剣なのだろうが、双剣も俺は悪くないと思う。

暗殺者みたいだと言われればそれまでだけだな。

「っと、ここが詰め所か。流石に早朝だけはある、眠たげだが兵の姿もちらほら見えるわけだが・・・そろそろ早朝訓練の時間か？」

「む、なんだ貴様は。一体何を言っている」

ぐあ、心の声が漏れていた！

まだだ、これくらいの声ならまだ大丈夫だろう。

ただ単に感想を述べただけに過ぎないわけだから、そうこれくらいはセーフ、セーフのはずだ。

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った」

「なんだ兄ちゃん、見たところ旅人のようだが・・・ここに定住でもするつもりか？」

「見聞を広める為、各地を巡り回っているのだ。曹孟徳殿が噂通りの御高名な方であればそれも有り、そうでなければここを去るだけだ」

「てことは、傭兵の扱いだな。体格は十分、歳も問題ないだろう。で、お前さんは腕に自身があるのか？」

「腕には自身がある。誰にも引けを取るつもりはない」

「ハハハ、そんな短剣で言われてもな。まあ、いいだろう。えーつと、胡車児だったか？お前が傭兵になるのに相違なければ、この紙を持って向かって左の扉に入れ。そうすれば、後はトントン拍子で話が進むだろうよ」

言われるがままに紙を受け取り左の扉に向かう。

用紙には、流し読み程度だが雇用契約に関するないようだと理解した。

契約金と出来高払い・・・ふむ、これはこれで中々うまい仕事ではないのか。

それだけ危険で死に安い仕事に回されるということでもあるだろうが。

「む、まさか早朝からこちらに来る者がいるとはな」

そこには青髪の女がいた。

受付業務でもしているのだろうか？

その割には、妙に威圧感があるというか、手練であるように感じる。

「どうした、右の扉ではなく左の扉に来たのだ。相当の手練なのだろう？名はなんというのだ」

なるほど、右と左である程度の篩い分けをしているということか。

左ではなく右であったのなら、恐らく一兵卒。

こっちはちょっと飛び級といったところか。

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った」

「御高名とな・・・生憎、華琳様はこの地にて刺史を為されている方だが立場は先に言った通り、刺史だぞ？それなのに御高名とは、一体どこで知ったのだ」

「私は私が見えるべき主君を探して見聞を広めつつ旅をしている。その旅先で曹孟徳様の噂を聞き、この陳留に来た」

「なるほど、旅の途中でか。では、胡車児にとって陳留はどのように映る。噂どおりの人物が治める街であると思うか？」

「十二分に。治安よく、活気溢れている街ではありませんか。ですが、それだけでは曹孟徳様本人を知ることにはなりません。故、曹孟徳様の下で働き、見極めようと思った次第」

「そうか。なら、華琳様の素晴らしさを存分に味わうがいい。華琳様こそ、天下を制するに値する霸王だと、そう私は思っているからな。とはいえ、胡車児の実力を知らぬうちには、出来ぬ話であるが」

「採用に際して試験を課す、ということですか？」

「その通り、幸い今は調練の最中で、姉者もいる。胡車児、腕には自身があるのだな？」

「ああ、誰にも引けを取るつもりはない程には」

「それは重畳、ならばその腕を見せてもらおう。私の後をついてきてくれ。・・・そういえば名を伝えるのを忘れていた。私は、姓は夏侯、名は淵、字は妙才だ」

行き成りのビツクネームに目玉が飛び出しそうになった。

確かに、確かに三国志の武将が女性になっているとは聞いていたが・
・俺はクマのような大女かと思っていたよ。

っと、夏侯淵に置いていかれぬように付いて行く。

先ほど姉者とかいっていたから、恐らく夏侯惇も同じく女性なのだろう。

そして課せられた相手は夏侯惇であり、彼女と試合をして俺自身の腕を披露せねばならないと。

やれやれ、最初から実に大物を引いたものだ。

だが、ここで夏侯惇の実力が知れば後は大体知れたようなもの。

ただ、手加減をしなければならぬというのは実に面倒なことでもあるがね。

「姉者、調練のところ悪いが華琳様への仕官者が現れた。武官志望で腕には自信があるらしい。ここは一つ、実力を測ってくれないか」

夏侯淵に付いて行くこと数分、ここは既に兵の練兵場。

今話しかけた女性が恐らく夏侯惇で間違いないだろう。

この頃はまだ眼帯はしていない、ということとはやはり今の時期は黄巾の乱前後なのだろう。

眼帯をしていれば少なくとも反董卓連合の時期を過ぎているだろうし、眼帯をしていない場合だとしても、兵に忙しさがなく、反董卓連合には至っていないはずだ。

となれば初陣は黄巾党の討伐任務になるのかな？

まあ、それも夏侯惇との試合を終えた後、見事仕官できてからと言う話なのだろうが。

「秋蘭がそういうのなら・・・だが、仕官するのはその男か？」

「私は、姓は胡、名は車児と申す者。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参った。私の実力を披露する相手が夏侯元讓様であるのなら、これ以上の喜びはない」

「ほほう、華琳様だけでなく、私のことも知っているのか。私はそれほど有名になった覚えはないが・・・まあいい、胡車児といったな？先手はくれてやる、」

なんか思った以上に好戦的というか猪突猛進な感じだな。

それに比べて夏侯淵は落ち着いている。

ふむ、史実だと逆のような気がしたが気のせいかな？

「先手、ありがたく頂戴します」

答えると同時に夏侯惇へ向かって駆け出す。

速度は手加減に手加減を加えて一般人より少しは早い程度。

達人からすれば造作もなく避けられる速度であり、当然カウンターを貰うことは確實、さて、どう返す。

「なんだ、腕に自信があるといった割りにこの程度か？確かに民と比べれば早いかもしれんが、それでは兵卒以下の速度だ」

接近して右手に構えた短剣で切りつけたが悠々と防がれる。

よくもまあ、あんな大剣を振り回せるものだ。

今回の試合だが、もちろん聖遺物は使っていない。

あくまで腕を披露するだけであり、彼女を殺すわけではないのだから当然のことだ。

・・・それもあるけど、兵に囲まれた中でやるのは少々拙い。

合戦時には奥の手となりうる不可視の斬撃は、なるべく知られたくない技だからな。

聖遺物使いとして全力全開で戦に赴くのもそれはそれで良いのだが、出切れれば使いたくはない。

緊急時は別として、それ以外に用いようものなら容易にこの世界の戦の定義を壊してしまう。

俺だけで勝敗が決まるなどと、そんな戦争に何の意味があるんだろうか。

「どうした、考え事か？ま、自信満々に切りつけた結果、悠々と防がれたのだから分からなくもないが・・・それでは戦場では死ぬだけだぞ」

「ご冗談を。これはあくまで試し撃ち、手加減に手加減を重ねた結果です。そうですね・・・本気というのはこういう一撃を言うのですよ！」

右手で夏侯惇の大剣を受けつつ、左手の短剣で切りつける。

先ほどの一撃とは違い、多少はマシな攻撃・・・恐らく一般的な手練の手腕くらいだと思います。

いや、手練の一撃を見たことがないから推測なんだけどさ。

「ほう、今のはなかなかやるではないか」

だが、それもまた容易に避けられる。

「余裕そうな発言だけど、顔に余裕がなくなってるよ。次も防げるのかな？」

「ぬかせ！私が貴様などに遅れをとるはずがない！」

「なら、今度は俺が受けよう。さ、夏侯元讓様、思う存分にかかってこられるがいい！」

「言われなくとも！」

先の攻撃で、手加減の目安は立った。

夏侯惇を焦らせるとまでは行かずとも、余裕をなくす程度も力を出せば十分だろう。

と、攻撃に関しては把握したから、今度は相手の攻撃を受け流す練習をしようかと思っただが・・・

意外に、というか予想通りに猪武者だな。

猪突猛進の猛者とは。ふむ、相手にしたくない部類ではないかな？

「はああああ！」

「そんな大振りで俺が捕らえられるとでも？」

夏侯惇が振るう大剣が俺を捕らえようと縦横無尽に襲い掛かる。

避けれるものは避け、一般的に避けるのが間に合わないと思われる攻撃は弾く。

うーん、強い。いや、強いんだろうけど。

時速240キロでの高速戦闘が可能な俺からすると兎戯に等しい。

欠伸が出ちゃうかもしれないな。

「ぐううう・・・胡車児！避けるんじゃない！」

「冗談でしょう？わざわざ俺が止まらずとも、夏侯元議様なら容易に当てられると思っているのですが・・・」

「言ってくれるな！くっ、貴様のような奴が在野に埋もれているな
どとー！」

おお！なんか評価が高いらしい。

ま、夏侯惇も自身の武に誇りをもっているだろうし、わからなくもないけどね。

・・・それはいいんだけど、さつきから俺、元の口癖に戻って俺とか
かいつてないか？

これ大丈夫かな？不敬罪で云々とか、そんなことにはならないよね？

上下関係って大変だ。

「夏侯元讓様、息が上がっておいでですが・・・そろそろ準備運動
は終わりではないですか？そろそろ夏侯元讓様の実力を拝見させて
いただきたいのですが」

「はっ！よくわかってるな！そろそろ私の実力を見せてやろうと
「だめだ、姉者」「

更に煽ってみたが、即座に夏侯淵からの横槍が入る。

んー、思惑としては一般兵の前だからやめておこうというところか
な？

夏侯惇は曹操陣営の武の象徴ともいえるし、彼女が突然現れた武將
に打ち負かされるのは好ましくないだろう。

「姉者には兵の調練があるだろう。それに胡車児の実力は十分計れた」

「秋蘭！だがまだ勝負はついていない！」

「ああ、だから勝負は調練が終わった後にでもすればいいだろう。今は、華琳様が下さった調練の任務を遂行するべきだ」

「ぐっ……確かに。華琳様の任務をやらぬわけにはいかない。胡車児！調練が終わったら決着をつけるぞ！」

「胡車児もそれでいいか？」

「私の実力をご理解していただけたのであれば、私としては異論などあるはずもございません」

「では再び私についてきてもらおうか。胡車児殿は現状では客将という扱いになるが……これも華琳様の承諾を得てからだ。これから華琳様に謁見することになるが、構わんだろう？」

トントン拍子で話しが進んでいくなあ、本当。

元々は兵卒からのスタートをするはずだったのに客将スタートとは。

ま、これも正式に任官するのであれば武官になるだけで、今は見極めるみたいなことを夏侯淵に言ったからこそその客将扱いだろう。

一気に高給取りか……お金の使い方を覚えないと。

どうにも武具や衣類の話は出来たものの、金銭感覚がないというか。

これ硬貨にどれだけの価値があるのかがさっぱりわからない。

政治が1つてのはこういったところに反映されるってことか。

これから先が実に不安になることである。

「で、どうなのだ。なにやら考えているようだが」

「ああ、すまない。考え込むと周りが見えなくなるのは俺・・・私の癖だね。曹孟徳様に会うという話だが、是非会わせていただきたい」

「ふ、その”俺”というのが本来の口癖か？私達の前では構わないが、くれぐれも華琳様の前では慎むように」

これから曹操への謁見か。

行き成りラスボスクラスとの邂逅とか、運がいいのか悪いのか。

だが、曹操に会えると言うのであれば会うべきだろう。

三国志において極めて明確な覇を打ち出そうとした、曹孟徳。

果たして、どんな人物なんだろうか。

夏侯淵と夏侯惇が綺麗どころだったわけだし、曹操も同じくそんなのだろうか。

いや、まてよ、曹操は美人を囲うのが好きだったはずだからもしかしたら男の可能性も・・・

まあ、会ってみれば分かることか。

男であれ女であれ、仕えるべき人物であれば主となっていたただけのことだからな。

そんなことは瑣末な問題、そう瑣末な問題なのだ。

第七話 最終、役員面接

「華琳様、武官として華琳様にお仕えしたいという者を連れてまいりました」

「そう。入りなさい」

ついに曹操への謁見か。

よくよく考えれば一連の行動は日本でいうところの就職活動と同じなんだろうけど・・・よくまあ、スムーズに行ったものだ。

日本でもこれくらいスムーズに就職活動が出来ていれば、この世界に来ることもなかったんだろうに。

重々しい扉を押しあけて、ある種、王者が為にでも作られた玉座を見やる。

玉座の間には親衛隊とも取れる武装集団が整列しており・・・なんだこれは圧迫面接か？

いや、まあ、護衛役だというのもわかっているのだが、それにしても数が多いだろう。

形式と言えばそれまでだが、そうでなければ恐怖を与えかねない。

つまりは、それだけ俺が信用されていないということの裏付けとなるのだが。

「この者が華琳様にお仕えしたいというものです。武官としては姉者……春蘭に引けを取らないほどの実力を持っております。文官としての適性は未だ測っておりませんが、口が良く回ることです、それなりの活躍はするかと思われます」

「ご紹介に与りました、私は、姓は胡、名は車児と申す者であります。御高名な陳留刺史である曹孟徳様の下で働きたく、志願しに参りました。どうかよろしければ、私めを末席へと加えさせていただきますことをお願い申し上げます」

「既に知っているとは思いますが、私は、姓は曹、名は操、字は孟徳。胡車児、貴方のことだけど、春蘭にも引けを取らないほどの武官と秋蘭は称したけど、それ以外に貴方が得意とすることはないのかしら？」

これは俗に言う、何か特技はありますか？とか何か資格はありますか？

といった類の質問ではないだろうか？

んー、返答しにくい質問だな。

俺は実際問題、武力以外では出世できなさそうである。

他に得意なことと言われても、統率はパーだろ？

知力はほぼ頂点に立つと思われるが、それを伝える政治がパー。

語彙が貧弱だから、外交官として立ち回ることもできないだろう。

当然物覚えも良くないのだから、内政官も不可能。

日常会話くらいの、日本でも身に着けた程度の会話であるなら、多少融通が利くけれど他は多分無理だろう。

となれば、俺に残されているのは武力と、そして聖遺物使いとしての力だけだ。

運用方法としては、斥候かな？

魅力を100にしてみました結果、妙に人の目を集めることとなってしまう気がするが、持ち前の俊足を生かして斥候を行うのがベストだろう。

「誠に申し訳ないことですが、私は武力以外に優れたところを持ちません。兵の統率を取ろうにも、意思の疎通に手間取ると思われ、また文官を担おうとしたところで、これもまた疎通を取るのは難しいでしょう」

「そう。それでも構わないわ。武に関して一芸に秀でるだけでも現状は十分でしょう。貴方に向上心があれば、意思疎通等という問題は瞬く間に氷解する。違うかしら？」

「誠にその通りでございます。曹孟徳様のご厚情、感謝にたえません」

「これで意思疎通が取れないというのは謙遜し過ぎだと私は思うのだけだね。まあいいわ、胡車兎、貴方を今日から客将扱いとするわ。それでいいのでしょうか？貴方は随分と遜っていたけれど、実際私を

見極めているのではないかしら？」

「恐れ多いことですが、その通りでございます。私自身各国を回り私が真に仕えるべき主君を探している最中でございます」

「なら、貴方のその行脚はここで終わるわ。貴方はこの曹孟徳に仕えることになる」

なるほど、確かにそうなりそうな気がしてくる。

なんとというか、こっぴどかかれるとでもいえるのか？

これがカリスマだとかいわれる素質とでもいえるのか。

悪い気はしないな。

「陳留での治世を拝見させていただき、曹孟徳様は誠、天下の英傑になれる方だと存じておりますが、それだけでは未だ足りぬと、私は感じております」

「容易に首を縦に振らないのね。ふふふ、気に入ったわ。胡車児、貴方は武官として明日の討伐軍に参加しなさい。兵の指揮に自信がなければ、私の指揮から学べることもあるはずよ。それに、秋蘭が認める貴方の腕をこの目でも見てみたいわ」

「承知いたしました。この胡車児、粉骨碎身の覚悟で務めさせていただきますましよう」

ということはかなり忙しい時期に邪魔をしてしまったということか。

訓練場にて将官が直々に訓練を付けているのもそのせい、明日の討伐軍の最終調整といったところだったのか。

恐らく対戦相手は黄巾党、黄巾の乱が始まる前なのか後なのかはわからんが、前者であるなら規模は小さく、後者であれば規模は大きくなるだろう。

それを陳留刺史でしかない曹操が行うというのは・・・武勲を立てる為か。

「さて、では胡車児の件はこれでいいわね。皆、下がっていいわ」やはり、親衛隊を配置したのは俺へ対処だったようだ。

これがまた、他国の武官であつたとか著名な人物であれば話は別なのだろうが、俺は今回アポイント無しで突然現れた無骨者だからな致し方ないことではある。

「胡車児、後は好きにしてもらって構わないわ。部屋で休息を取りたいのであれば、貴方の部屋へと案内をさせる。明日の討伐軍への参加で色々準備もあるだろうから、また詳しいことは後で話しましょう」

額面通り言葉を受け取れば実に俺の為を思っているのだが、どうにも用は済んだので下がりなさいという意味合いの言葉ではないかと勘繰ってしまう。

強ち間違いでもないのだろうが、これも俺の悪い癖だなあ。

もっとこう、なんというか、夏侯惇のようになれたら楽なんだろう

が。

「それでは失礼させていただきます。本日は、曹孟徳様に謁見できたこと、誠に感謝にたえません。この礼は、必ずや明日の討伐戦にて報いらさせていただきます」

「期待しているわ。討伐に関しての委細は後で夏侯淵に聞きなさい。二人とも、下がっていいわ」

夏侯淵と共に玉座の間から去る。

曹操は夏侯淵から討伐戦のことを聞けといていたな。

「夏侯妙才様、明日の討伐戦のことだが・・・」

「夏侯淵で良い。姉者に対しても同様に夏侯惇と呼べばいいだろう。これから共に肩を並べて戦うのだ、それでは些か他人行儀過ぎるというものだ」

「そうか。なら、夏侯淵。再び聞くが、明日の討伐戦とはどこで誰と戦うのだ？」

「隣街で賊が蔓延っている。黄巾を纏っているので、便宜上、黄巾党と私達は呼んでいるが、その討伐だな。華琳様は陳留刺史という立場でいらっしゃるのだが、元々この地を治めていた県令殿が黄巾党に怯えて逃げ出してしまっただけ」

「なるほど、隣街といえども何れ曹孟徳様が統治する地域に違いはない。後の為にもここで賊を討伐しておいた方が色々好都合ではあるな。何より、名が売れるというのは得難いものだ」

となれば、ここの討伐戦においての勝利は当然

また、なるべく寡兵で且つ被害の少ない勝利を齎せば曹操軍の威光は高まるな。

俺に出来ることと言えば、最前線に立ち兵の指揮を無理やりあげる
こと。

それと、被害を俺が引き受けることか。

「打算的なものだけではないがな。華琳様は民草に対して慈悲深いかただ、己の治めぬ領地だとはいえ、賊が蔓延っているのが我慢ならないだろう」

「なるほどな。夏侯淵が信奉しているのもわかる気がするよ。悪いが、俺は明日の支度をしようと思う。夏侯淵も忙しいだろうから・
・俺が使うことになる部屋だけ案内してもらえるか？」

「ああ、お安い御用だ。胡車児が使う部屋は・・・こっちな」

さて、明日は自身の望んだ武勲を立てるべき機会、賊の討伐戦だ。

烏合の衆を蹴散らすに相違ないことだろうが、油断は禁物

少なくとも、俺は不老不死の恩恵を得ているゆえに、ドジを踏んでも問題は無いが他の者は違う。

行軍が巧くいくように、事前偵察でもこなしておくか。

隣街といってもそれほど遠いわけではあるまい。

ま、山を越え、谷を越えとなっても、造作もないことだろうけど。

一つここで活躍でもして、真名を授かるほどには信頼を勝ち取りたいものだ。

というより、いちいち敬った言い方をするのが面倒なんだよな。

何より、こづいづ堅苦しいのは苦手だ。

騎士を目指しているのに苦手とは不思議に思うかもしれないが、それはそれ、これはこれ。

別に主君と従者の関係などいくらでもあるだろう？

その中に非常に近い関係があっても構いはしない。

そうだろう？

第八話 先行偵察

「つと、ここが夏侯淵が言っていた隣街・・・でいいんだよな？」

おかしいな、賊が蔓延っているといっていたはずなのに・・・

「んー、向かう先を間違えたか？これってどう見ても廃墟だよな」

夏侯淵から明日救助に向かう隣街の場所を聞いて疾走してきたはいものの、そこは既に廃墟となっていた。

街と呼ばれていたであろうものは既に大半が焼け落ち、とても人が住めるような環境とは言えない。

陳留から距離にして大よそ1000里ほど・・・キロに換算すれば40キロくらいか。

直線距離であればこれよりも短いだろうが、あいにく山を越えていることから距離が伸びている。

これを討伐軍として移動するとどれくらいかかるだろうか？

軍の編成にもよるだろうが、どの道輜重隊の行軍速度は遅く、戦備行軍のように周囲を警戒しつつ移動すれば更に速度は落ちるだろう。

それに加え、整備されているはずもない山道を通るわけであるから、非常に時間がかかる。

もつとも、輜重隊では山を越えられぬ可能性は十分にあることから山をある程度迂回した街道ルートで討伐に赴くはずだろうが・・・一日二日では到底辿り着けないだろう。

となれば、騎兵を戦備行軍で先行させつつ、主力を含む輜重隊列はその情報を元に行軍速度を決める。

こんなところだろうか？

俺には軍の運用術などわかるはずもなく、あくまで推測でしかないが、兵の疲労、炊事を考えたらもっと遅くなるのかもしれない。

近代的な装備を整えていれば、水等の物資も潤沢に、且つ、大規模に輸送できることから行軍速度は早まるとは思っただが・・・

ま、それを俺が考えても仕方のないことか。

恐らく、今回の討伐軍は総大将に曹操本人が赴き賊を討伐するはずだ。

それが最も名声を高めやすく、合理的であるからに違いないからな。

「軍に関しては、専門家である彼女らに任せればいいとして・・・討伐する相手がいないというのは、困った話だな」

街一つを焼き払えるほどの人員がいるのだから、どこかに根城を構えているはず。

無ければこの街を焼き払わずとも、占拠して好き放題に筆り取った方が賊としては良いわけで・・・

それをせずに略奪をして根城に引き返す、更に生存者を残さぬように皆殺しにしたのであれば、賊軍だとはいえども間違ひなく指揮官がいるはずだ。

「寡兵にて敵を打ち破る、相手は所詮賊である。んー、過信が下で足を掬われそうなのがするな」

見事罠に嵌るだけの御膳立てが揃い過ぎだな。

これは、そう、なんというか、調子に乗って突撃した誰かが奇襲を受けて窮地に陥るような。

そんな気がする。

曹操軍がそんな罠に嵌るとは思わないが、勝つて兜の緒を締めよってという言葉もあるくらいだ、慎重に慎重を重ねても問題はないな。

「この場にいるのが俺ではなくて、魏を代表するような軍師・・・荀？とか郭嘉が居ればうまく表現できるのだろうが、これを俺が説明するのは無理だな。何せ、政治が1なわけだから」

ま、無いものをねだっても仕方があるまい。

「一先ず、賊軍を探すか。出来れば賊軍の動きも把握しておきたい。飯初の主であるとはいえ、失うなんてことは騎士にあるまじきこと。そして軍として動くのは俺も初めてであるから、出来るだけ準備をしておきたい」

今の俺にできることと言えば、駆けまわって情報を得ることくらい

だろう。

勿論、単騎駆けを行い敵將を討ち取ることは極めて容易であるが、それでは組織として体裁が保てん。

兵は一騎当千の英雄に縋り、自ら戦場に立つ意味を見失うであろうし、主君は見返りを求めずに莫大な戦果を積み上げる将官に疑心を感じるようになる。

曹操が器の小さい者だとは思わないが、彼女がそうではなくとも周りは違う。

徒に力を用いることは我が身を滅ぼすことになるから、やはりここは慎ましくいくべきだな。

当然、平時においては慎ましく、火急時には全力全開も止むを得ないことだがね。

「さーて、この廃墟を中心に縦横無尽に駆け回るとするか。・・・たぶん誰にも見られないだろう、たぶんな」

時速240キロを超える速度で走る人間の顔なんて覚えられるはずもないから好き勝手走っても問題ないだろう。

というか、そんな人間は普通いないわけだから誰かに話をしたとしても戯言と思われる程度、誰も信じるはずがない。

というわけで、後先考えずに縦横無尽に疾走、探索を開始する。

まずは周囲の地形に着目して、河川から調べていった。

大規模な軍団を組織する場合、兵糧も必要ではあるが何より水資源は得難いもの・・・容易に井戸を掘れるわけでもなく、掘り進んでも水が湧き出ないこともあるから、都市と河川は切り離して考えることはできない。

「川沿いを進めば何かしら手掛かりが手に入るかと思っただが、何もないか。とすると、賊はどうやって水を賄っているのだ？」

余程多くの井戸を有しているか・・・なるほど、山間部での湧き水か。

河川とはそもそも、小さな河川が統合して一つの流れになっているのだ。

つまりは、主流を抑えなくとも、それに連なる水域さえ押さえれば水を賄うことは可能だ。

「これは実に面倒だ。幾重にも枝分かれた河川を探すこともさながら、そこに井戸や湧き水も加われば膨大な数になる。探せと言われれば探すのも吝かではないが、時間が掛かりすぎるだろう」

夏侯淵には討伐の準備があるとしか伝えていない。

当然、現地に赴いていることなど知るはずもなく、長時間見かけぬとなれば何かと問われるのは明らかである。

「可及的速やかに、そして正確に情報を掴む必要があるか」

だが、闇雲に探したところで何ら進展がないのは今経験したばかり

だ。

となれば・・・

「原点に戻る、か。廃墟を隈なく探索して生存者を探そう。後は足跡と、蹄の跡から戦力を探るか」

賊が騎兵を運用しているか否かは実に有用な情報となる。

奇襲を受けた際、賊が騎兵を用いていれば逃げ切るのは至難の業になるだろう。

が、もし騎兵でなかった場合は、敵正面の兵を犠牲に本体を撤退させることも可能だろう。

再び廃墟に向かい、隅々まで探索を行う。

残念ながら、廃墟には焼死体や腐乱死体、また何やら野生動物に食われでもしたのか白骨死体しかなかった。

幸いなことに、蹄はなかったことから賊は騎兵を運用してはいないらしい。

運用していたとしても精々指揮官程度であり、脅威を感じるほどのものではないだろう。

「うーん、どうも妙だな。本当にこの街に賊が蔓延っていたのか？確かにそれは間違いないだろうが、一日二日で死体が腐るとは到底思えない」

だが、曹操や夏侯淵は確かに言っていたのだ。

隣街に賊が蔓延っているのだと。

「となると、最も疑わしいのは、これを誰が報告したのかということか」

要は誘い込まれているのではないかということ。

実力があり、野心もある曹操を畏にかけよつとするものがあるのではないかということなのだ・・・

「誰による陰謀か想定できぬ上に、証拠もない。机上の空論も甚だしいな」

仮に曹操に恨みを持っている者がいるとして、謀殺しようとしているのであれば疑うべきは以下の点である。

まず、街に賊が出たことを陳留に届ける者。

これは別に誰でも構わない。

街から来たただとか、賊に遭遇して命からがら逃げてきたただとか、それだけで十分だろう。

事実であるかどうかは問題ないな。

ただこれだけではインパクトが薄く、信憑性が乏しい。

故に、当然ながら斥候を出して賊の規模を把握するわけだから、曹

操軍の斥候兵も疑わしい。

ここにはスパイがいるか、もしくは実際に賊に会っているかの2つの場合がある。

スパイであれば、確かに賊がいたとの虚偽の報告をすれば良い。

問題なのは、実際に賊に会った方が。

賊に扮した奴らに斥候が襲われ、わざと情報を与えられて戻ってきた場合だ。

スパイであれば、自らの情報をきめ細かく報告することはしないだろうが、現に襲われた斥候の場合はきめ細かく報告するだろう。

それが掴まされた情報であれ、彼自身は命からがら逃げてきたのは違いないのだから。

最後は・・・

「黄巾党に怯え、姿を晦ました県令」

本来であれば、曹操が治める地ではないのだが、彼女の力量を知った上で誘い込んだのであればまさに県令は策士だろう。

県令がいれば、県令が担うべき仕事であったのだ。

それが巡り巡って策謀となるのであれば、これほど見事な誘引はない。

曹操自身、実力と不釣り合いな刺史という立場であり、その状況の中、
県令が失踪、隣町で賊が発生する。

なるほど、これほどお膳立てされた状況はない。

「とりあえず、陳留に戻って夏侯淵と相談か。ま、それが一番か？
俺が報告するよりも夏侯淵を介して報告した方が信憑性が出るわけ
だからな」

そうと決めたらさつさと陳留に戻る。

あれこれ考えていたせいか、昏過ぎに陳留を出たのだが既に日が落
ちようとしている。

このままでは陳留の城門が閉まってしま・・・いや、閉まっている
かもしれないな。

「夜陰に乗じて城壁を越える。んー、まるで俺が賊みたいだな。だ
が、致し方あるまい。既に城門は閉じているだろうし、問題はなん
と言いつくするかだ」

「城壁に上り鍛錬していたとも言えば十分通じるだろうか？・・・
日が落ち始める前に戻ってさえいればこんなことで悩む必要はなか
ったものを」

喚いても変わらぬものは変わらんか。

ならば、さつさと戻ってこの廃墟のことを話すに限る。

このまま行軍を行えば県令による奇襲攻撃を受けかねない、寡兵で

は危険であるとの進言を・・・

これを巧く伝えられればいいのだけどね。

知力馬鹿にはどうにも荷が重い。

「ま、なるようにしかならんか。これが俺の見当違いであれば嬉し
いんだけどねえ」

第九話 初陣 前編

「どうも、リポーターの胡車児です。現在私は、隣街に蔓延る賊徒を討伐に向かっている最中です」

「？胡車児、お前は何を言っているんだ？」

「夏侯惇・・・今はそつとしておいてくれ。今の俺はちょーつとばかり鬱なんだ」

「戦を前に気分が憂鬱だと？！貴様それでも将官か！」

相変わらず夏侯惇は空気の読めない奴だ。

知り合ってまだ二日目だが、恐らく奴には表裏なくこういう奴なのだろう。

分かりやすく嫌いではないが、今はちょっと静かにして欲しい。

ま、これも自己嫌悪によるもので、夏侯惇へはただの八つ当たりなのだが。

昨日のこと、山を越え廃墟である隣街から帰ってきた俺は夜陰に乗じて城門を駆け上がり、誰にも発見されることなく忍び込んだ。

城壁の上には勿論、警備を担っていた一般兵がいたが、現実的に城壁を駆け上ることなど一般的には出来ない話で、警戒などはされていないはずもなかったわけだ。

誰にも見つからず誰にも咎められないと、上々の首尾に満足しつつ与えられた部屋に帰還、したのはいいのだが、ここで儂く夏侯淵に見つかる。

「胡車児、探したぞ？一体どこにいたというのだ？」

「む、俺を探していたのか。それは悪かった。陳留には昨日来たばかりでな？街中を散策しつつ、鍛錬をしていたのだが・・・」

「呆れた奴だ。明日の準備をするといっておきながら、街を散策しているとは」

「それは大目に見てもらいたいな。夏侯惇との打ち合いで短剣が欠けてしまったね。鍛冶屋を探していたのだ。ま、見つけれなかったがね」

「というのは勿論嘘・・・ではない、実際に欠けてはいる。」

打ち合っている最中は気が付かなかったのだが、所詮は市販品、頑丈とはいっても程度が知れているということだな。

「鍛冶屋か・・・胡車児、それは市販品か？もし胡車児が華琳様に仕えると言うのであれば腕の良い鍛冶屋に特注でもすればよいのだが・・・そんな金はないだろう」

「ああ、ないな。だからこそ仕官したともいえる。ま、金はいいでに過ぎないが、あつて困るものではなく、何をするにも金がかかるからな」

「その通りだ。まあ、正式に仕官する気になったら言ってくれ。腕利の鍛冶屋を紹介する。それとだ、胡車児は客将といえども華琳様の配下、鍛錬は練兵場で行ってくれ」

「はいはい、その通りです。で、この時間に俺の部屋にいるっていうことは、何か用事があったんだろう？俺も夏侯淵に話しがあつたけど……」

隣街……あの廃墟で俺が推測したことについて話しておかなくては。

信憑性が乏しく、予定通り討伐が決行されたとしても、前情報無しとそうでないかでは心構えが変わってくるだろう。

「すまないが、私も忙しい身だね。姉者が書類仕事を嫌がるものだから、私に回ってくる分が多いのだよ。だから、私から先に話をさせてもらって構わないか？」

「構わない。夏侯淵が先に話をしてくれ。恐らくその話とやらは、明日のことだろう？」

「胡車児は察しが良いな。まさに明日の討伐に関することだ。華琳様率いる討伐軍1000は日の出と共に行軍を開始する。向かうは、胡車児も知っている通り、南東にある隣街だ」

ん？んんん？

ちよつと、待てよ？

今、夏侯淵はなんと言った。

南東の隣街だと？

俺が今日向かった、北西の隣街ではなく、南東の隣街だと？！

「お、おい夏侯淵、今なんといった？俺には南東と聞こえたが・・・

」

「ああ、南東の隣街で間違いない。ここ最近、南東の隣街に賊が蔓延るようになってな。最初はただの荒くれ者だったのだが、次第に数が増え、治安を脅かすようになったのだ」

ぐわあああ！

なんとということだ、てっきり北西の隣街だと思って北西の隣街を先行偵察していたのに！

実際は南東の隣街で・・・俺は、俺は一体何をしていたんだ。

謀殺が、畏が、奇襲が・・・ぐふう。

ここで政治が1という弊害が出てきたというわけか！

北西と南東の聞き違いなど、普通はしないだろう！

「おい、胡車児。寝るのはまだ早い、せめて話を聞いてからだ。で、その賊が街の付近に拠点を構えて・・・ああ、老朽化して既に使われていない砦を根城に大よそ4000ほどに膨れ上がっているようだ」

「・・・なるほど、4000か。それは実に多いことだな。で、どうするんだ？寡兵で勝てば名は得ることが出来る。だが、死んでは元も子もないぞ？」

恥ずかしくて死にたくなるが、今は夏侯淵の話の聞かなくては。

俺の偵察が無意味になった以上、夏侯淵から聞けるだけ情報を得るしかない。

「その通りだが、所詮賊は烏合の衆であり、正規の訓練を受けた軍の敵ではない。これは慢心ではなく、ただの事実だ。賊は4000と兵だけはあるが、小突けば指揮が崩壊するほどに軟弱だからな」

「それはなんだ、経験則か？前のそうであつたから、今回もそうであるというわけじゃないだろう？呼び名は賊であれ、中身は違うんだ。違う結果も十分にあり得るぞ」

確かに、夏侯淵が言うとおり正規軍と賊軍では兵の訓練の度合いが違う為、戦えば正規軍が勝つだろう。

だが、それも1対1では勝つだろうが、1000対4000ではまた別の話だ。

陳留から南東つてことは、俺がこの世界に来た場所だろう？

つてことは、ただただ荒野が広がるばかりで、4倍差という兵力差に正規軍が飲み込まれんとも限らん。

包囲をされずとも、自軍の4倍の兵が敵にいるというのは圧倒されるに違いない。

「まさか、事前調査による推測だ。とはいえ、経験則も確かに含まれている。南東の賊軍は急速に成長した結果、満足に装備が行き渡らず、鎧は布か皮、武器は剣でも持っていればマシな方で素手が多数だ」

「なるほど、確かにその賊軍に正規軍が当たれば容易に打ち破ることが出来るだろう。武器を持たぬ相手など、相手にはならん。で、目標はどれほどだ？賊の全滅を目標とするのか？」

「当然、賊軍は一人残らず首を刎ねる。というのも、胡車児、お前は知っているか知らないが、一月ほど前、陳留の北西の街が賊に襲撃されるといことがあった。その報を華琳様が受けたときには既に街は廃墟と化し、残っていた賊軍を討ち捨てることしか出来なかった」

「ははあ、つまり今回の賊軍はその残りも含まれているというわけか。ある意味弔い合戦でもあり、勝たねばならないし、逃がしてはならないというわけね」

「ああ、そうだ。相手より寡兵で攻め込めば、奴らも勝機を見出して果敢に攻めてくるだろう。自らが誘い込まれたなどと露知らずにな」

それなら更に勝機は上がるな。

恐らく、曹操の討伐軍には廃墟になった街からの志願兵が多くいるはずであり、極めて高い士気を期待できる。

寡兵相手と侮れば、その手痛い一撃を貰ったときの賊軍は・・・指

揮官がいなければ潰走は免れまい。

「用意周到なことだ、それだけの条件を整えれば負けるほうが難しい」

「華琳様に出来ぬことなど何もない。でだ、胡車児には討伐隊の1部隊を率いてもらいたい。華琳様には本隊を、姉者には騎兵隊を、私は弓隊を、後は歩兵隊がいるのだが人が足りぬのだ」

「俺に歩兵隊を率いれというわけか？正気か！？俺には兵を指揮することなど出来んぞ！」

正気の沙汰ではない！

統率1の俺に兵を率いれとは・・・最初から混乱壊乱恐慌状態で兵士を戦わせるようなものだぞ！

たぶん。

「そうだ。どの道華琳様の下で武官として活躍するのであれば、兵の千や万くらい率いてもらわねば困るのだ。幸い、今回は数百と小勢であるから、胡車児が不得手とはいっても問題ないだろう」

「俺が、俺が敗北の一因を担うことになるのか。ぐぐぐ・・・どうなってもしらんぞ！」

「そこを巧くやるのが胡車児の腕の見せ所だろう。期待しているのだ、良い戦果を頼むぞ」

夏侯淵め、言いたいことだけ言って出て行きやがった。

良いだろう、お前達が俺に兵を率いるというのなら率いてやる。

お前達は俺に信を託したのだ。

ならば、俺はその信に報い、勝利をもぎ取ってやろう！

つてのが昨日の出来事なのだが・・・

「って、奮い立ったのはいいけど、やっぱり無理な気がする。もう既に、俺の隊、胡車児隊は崩壊寸前だからな」

「また、胡車児は何を言っているのだ。戯言を呟いている暇があれば貴様の隊をなんとかしろ！」

「夏侯惇の言うことも最もだ・・・が、だめだ、俺には兵を率いる才能が本当に欠片もない」

俺の後ろを行軍する胡車児隊は、皆、目が虚ろで生氣を感じさせない。

こいつらも陳留を出る前は元気だったんだけど、次第に意気消沈して仕舞いには亡者の行軍のようになってしまった。

もうなんか、統率1つて酷い。

今回の討伐戦で最大の敵は間違いなく俺だな、俺。

俺が一番の強敵となるだろう。

「夏侯惇様、前方に砂塵を確認！賊軍かと思われませす！」

あれこれ、考えているうちに賊軍と遭遇。

というよりは見るからに寡兵であることに釣られて突撃を仕掛けてきた感じか。

「ご苦労。では、我が軍も所定の配置につくとしよう。胡車児、貴様、賊軍を少しでも後ろに逸らして華琳様や秋蘭の手を煩わせて見る！後でこの私が・・・」

「はいはい、わかったわかった。ちゃんとやるさ、うまくやる。敵を逸らさずにちゃんと前線を支えきるさ、期待していてくれ」

「ふん、言ったからには実行してもらおうぞ！」

夏侯惇が率いる騎兵は側面待機の遊撃部隊。

基本は俺が率いる歩兵部隊が前線を支え、後方から夏侯淵の弓隊による斉射で敵兵を討ち取る。

曹操は後方予備だが・・・この分だと早々に前線に来ることになるか。

こんな目が虚ろな亡者共では前線を支えることなどままならない。

まったく、誰のせいだろうか。

「胡車児隊、構え！我が隊は敵軍を正面から受け止める、後方には我が隊を援護する夏侯淵隊と、本隊である曹操様がいらっしやる！」

くれぐれも、抜かれることのないように！」

「・・・うわああああ！敵だ！敵だ！敵が来るぞ！もうだめだあああああ！」

一瞬で恐慌状態になってしまった。

お前ら、後方で味方が援護しているっていったらどう！

それに、総大将である曹操も後方予備としているんだ！

お前達が、恐慌状態になったら誰が総大将を守るといふのだ！

敵軍を正面から受け止めるって言葉だけに反応するんじゃない！

肝心なのはその後だ、後！

「はあ、もうだめだ。これでは兵らに期待することはできん。かくなる上は・・・」

俺が一人で支えるしか、それ以外に術はないということだな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248z/>

恋姫無双で就職中！

2011年12月20日01時56分発行